

[論文]

『ペトロの第一の手紙』における奴隷への勧告

——Iペトロ書2章18-25節について——

吉 田 新

はじめに

1. Iペトロ書2：18-25の伝承と構造
 2. 翻訳
 3. Iペトロ書2：18-20の分析
 4. Iペトロ書2：21-25の分析
- まとめ

はじめに

Iペトロ書2章11節は、「愛する人々よ、私は勧める (Αγαπητοί, παρακαλώ)」という文言によって始められている。同2章18-20節「奴隷への勧告」、21-25節「模範としてのキリストの受難」は、13-17節「地上の権威への従順」に始まる一連の勧告句に続いて記されている。このような奴隷への勧告は、新約文書、また初期キリスト教文書にも記されている¹。本稿では、Iペトロ書2章18-25節に記された奴隷への勧告句と模範としてのキリストの受難を語る箇所を分析し、Iペトロ書における意義について考察する。

1. Iペトロ書2：18-25の伝承と構造

先述したように、初期キリスト教文書において奴隷の扱いをめぐる見解は、様々な箇所而言及されているが、当時の奴隷制度を根本から否定するものは存在しない。むしろ、奴隷とその所有者とのあるべき関係を説く内容である。パウロはガラテヤ書3章26-28節に

¹ コロ3：22-25、エフェ6：5-8、Iテモ6：1-2、テト2：9-10、ディダケー4：11、バルナバ19：7、イグ・ポリ4：3。

において、キリストを信じてバプテスマを受け、キリストを着た者は皆、奴隷も自由人もないと宣言している。しかし、パウロは奴隷制度そのものを否定しておらず、奴隷解放を推進してはいない (I コリ 7: 21 参照)²。奴隷に対しては、多くの場合、「(主人に) 従い、畏れよ」と命じている。この種の勧告はコロ 3: 22, エフェ 6: 5, テト 2: 9 に記されており、I ペト 2: 18 以下も基本的にこの種の勧告句と共通している³。

これらの奴隷への勧告は、同一の伝承を基にしていると想定できるが、各書簡で内容は相違しており、元来の伝承を導き出すのはほぼ不可能である。初期キリスト教内で比較の後期に成立した書簡のなかで、奴隷への勧告が広範囲に受け取られている点を鑑みれば、教会内で一定数のキリスト者の奴隷が存在していたと考えられる⁴。I ペトロ書も同様に、奴隷の身分である読者を想定している⁵。

模範としてのキリストの受難のペリコーペは、主人への従属 (18-20 節) と夫への従順 (3 章 1-6 節) の間に挟まれている。内容はキリストの受難とその意義であるが、不当な苦しみを受けても、苦難に耐えることが神の恵みであり、そのために奴隷である彼、彼女らは召されたと送り手は強調している。

イザヤ書 53 章の引用句を交えて展開される 2 章 21-24 節は、元来、独立した伝承であり、新約聖書内で度々見られるキリスト賛歌 (Christushymnus) の一つであると考えられている (フィリ 2: 6-11, I テモ 3: 16, I コロ 1: 15-20 参照)⁶。研究者の多くが、この箇所は

² I コリ 7: 21 が奴隷解放を勧めているのか、またはそれを否定しているのか議論されている。この文脈からは奴隷解放の推進を読み取るのは無理がある。島 (2001 年), 133-137 頁, 同 (2011 年), 28-40 頁参照。

³ 奴隷 (οἰκέτης) への勧告は、初期ユダヤ教のテキストにも存在している (シラ 33: 25-33, フィロン『十戒各論』II. 67 参照)。I ペトロ書にはエフェ 6: 9, コロ 4: 1 のような主人への訓戒は記されていない。

⁴ ローマ帝政初期における帝国全域の奴隷数は、総人口 (5,000 万~6,000 万人) の内 13~18% (800 万~1,000 万人) であると木村は見積もっている。キリスト教共同体内にも、一定数の奴隷が存在していたと想定しても問題はないだろう。木村, 149 頁。

⁵ I ペト 2: 18 以下の奴隷への勧告は、単に奴隷のみを対象としたものではなく、危機的状況下に置かれている「すべてのキリスト者」に向けたものとブロックスは主張する。Brox, 128-130 (ブロックス, 168-169 頁)。確かに、I ペトロ書全体の視点から見れば、そのように読むことは可能であるが、ここではパウロ書簡に登場するような「キリストの奴隷 (δοῦλος)」ではなく、「家庭内奴隷、召使 (οἰκέτης)」への呼びかけであり、より具体的な人物への訓戒であることに注目したい。

⁶ ヴィンディッシュが指摘し、ブルトマンは彼の仮説を展開している。Windisch, 65; Bultmann (1967), 295-296 (ブルトマン, 130-132 頁)。Vgl. Lohse, 87-89; Wengst, 83-86; Deichgräber, 140-143; Schweizer, 63. 速水, 423 頁, 辻, 691-692 頁。ブルトマンの考察を基に各釈義家は自説を展開するが、ヴェングトのそれは特徴的である。21 節は元来、異読に記された「彼は死なれた (ἀπέθανεν)」であると推測するが、その根拠は確かではない。21 節以下はキリストの死そのものよりは、その受難を語る内容である。ブロックスらも同様の見解。Brox, 135 (ブロックス, 178 頁)。Vgl. Goppelt, 200; Elliott (2000), 524f.

Iペトロ書において1章18-21節と3章18-22節と共に、キリスト賛歌の伝承の痕跡を認めている。ネストレ・アールントのギリシア語新約テキスト(26版以降)でも、これらの部分は詩文のように整えられ、改行し、段落を下げ、前後の文章と区別している。確かに、2章13節からの地上の権威への服従、18節からの奴隷への勧告内容と21節からの内容は文脈上、直接に結び付かない。21節後半から24節(または25節)まで、完結した伝承と受け取ることも可能であろう。だが、「苦しみを受ける(πάσχω)」という語句が前後続いて用いられており(2:19, 20, 21, 23)、受難のキリストを模範とするというモチーフは、この書簡で度々見られる⁷。そのため、この部分は伝承をそのまま受け入れたというより、それを参考しつつ、著者が書き直したと考える方が自然と思われる⁸。おそらく、Iペトロ書の送り手は、なぜ従わなくてはいけないのか、という服従の命令の根拠を示すために伝承を用いつつ、21節以降の受難のキリストの姿を記し、その姿を模範とすべきと説いたと思われる。主人への従順の根拠として、受難に耐えたキリストの姿を語るのは、3章5節から夫への従順の根拠としてサラの従順を説明する件と似ている。また、召命の理由としてキリストの苦難とその死を説く内容は、3章18節でも繰り返されている。ただし、3章18節では奴隷のみを対象とせず、全ての人に向けられた内容になっている。では、次に私訳を示し、詳細に内容を検討したい。

2. 翻訳⁹

- 18 奴隷らよ、あらゆる畏れをもって(畏れのうちに)主人に従いなさい。善良で寛大な主人にだけでなく、意地の悪い主人にも[従いなさい]。
- 19 不当な苦しみを受けても、神の意識(神を意識すること)ゆえに苦痛に耐えるならば、それは恵みだからである。
- 20 罪を犯して打ちたたかれ、それを耐え忍んだとしても、何の誉れになるだろうか。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶならば、これこそ神からの恵みである。
- 21 このために、あなた方は召された(呼ばれた)からである¹⁰。キリストもまたあな

⁷ Iペトロ書では「苦しみを受ける(πάσχω)」は12回使用されおり、新約文書のなかでは圧倒的に多い。この書簡の主題を理解する重要な術語である。

⁸ 田川, 302頁, 吉田(2016b), 40-45頁参照。

⁹ 丸括弧内は別訳を示し、亀甲括弧内は翻訳上の補い。

¹⁰ フランシスコ会訳はこの部分を節の後半に置いているが、そのように訳す必然性はない。「τοῦτο」は前節20節までの内容を指しているので、節の前半に置いて訳すべきだろう。Vgl. Goppelt, 199; Achtemeier, 198; Michaels, 142; Schreiner, 141; Dubis, 76.

た方のために苦しみを受け、彼の足跡に踏み従うよう模範を残されたからだ¹¹。

22 彼（キリスト）は罪を犯さず、その口に偽りはなかった。

23 彼（キリスト）は罵られても罵り返さず、苦しめられても脅さず、正しく裁かれる方に〔自身を〕委ねた。

24 彼（キリスト）は私たちの罪を自らの身をもって、木の上に運び上げた。私たちが罪に死に、義に生きるためである。その傷によってあなた方は癒やされた。

25 なぜならば、あなた方は羊のようにさまよったが、今や、あなた方の魂の牧者であり監督者のもとへ帰って来たのである。

3. I ペトロ書 2：18-20 の分析

18 節からの勧告句は、主人がキリスト者ではない奴隷たちに向けた勧告と思われる。I ペトロ書のこの箇所に記された語句は、一般的な奴隷を意味する「δοῦλος」ではなく「οἰκέτης」であることに注目したい¹²。家庭内の家事等に使える「家内奴隷」や「召使」を意味するが（ルカ 16：13，使 10：7，ロマ 14：4 参照），本訳では「奴隷」と訳す¹³。「οἰκέτης」は「主人」を意味する「δεσπότης」に対応している¹⁴。「ὑποτασσόμενοι」は I ペトロ書 2：13，3：1，5，22，5：5 にあるように，同書の頻出語である「従わせる（ὑποτάσσω）」の受動態現在分詞であるが，ここでは命令の意味に解する¹⁵。「ἐν παντὶ φόβῳ」は直訳では「あらゆる畏れのうちに」ではあるが，「あらゆる畏れをもって」と訳す。新改訳「尊敬の心を込めて」，フランシスコ会訳「心からの敬い」は意訳し過ぎだろう。「尊敬の心」という意味を原文から導くのは不可能であり，この「畏れ（φόβος）」は主人に対するものではなく，神に対するものと理解する。確かに当時の奴隷にとって，主人は決して寛大ではなく，生殺与奪の権を握っている存在であり，ここでは主人への畏れと理解することも可能である（エフェ 6：5 参照）¹⁶。しかし，I ペトロ書において，畏れと神とは結び付いて語られていることに注目すべきであろう（1：17，3：2 参照）。とり

¹¹ 岩波訳は「足跡に踏み従う（岩波訳では「足跡に従う）」よう」を前半の「苦しまれた」に関連付けて訳しているが，「ἴνα」節は直前の「模範を残す」に繋げて訳す方が自然である。

¹² I ペト 2：16 では「神の奴隷（δοῦλος）」と記されているので，この箇所と使い分けられているとも考えられる。Vgl. Goppelt, 192；Vahrenforst (2016), 121.

¹³ 文語訳，口語訳「僕たる者」，共同訳，新共同訳「召し使いたち」，新改訳「しもべたち」，岩波訳「下僕たち」，田川訳「召使」。

¹⁴ I テモ 6：1 以下，テト 2：9 参照。

¹⁵ Vgl. Blassa/ Debrunner, 468.2. Vgl. Selwyn, 175；Michaels, 137f.；Achte-meier, 194；Elliott (2000), 516；Schreiner, 137；

¹⁶ Vgl. Brox, 131f（ブロックス，172-173 頁）。

わけ 2 章 17 節では、畏れるべきは人間である王ではなく、神であると強調している¹⁷。さらに、19 節に「神の意識ゆえに（神を意識することゆえに）」とあり、これらと関連付けて理解する必要もあるだろう。ここでは畏れは神のみに抱くものであり、神への畏れのうちに、地上での主人に従えと説いていると考える¹⁸。奴隷たちが畏れ、その存在を意識するのは人間ではなく神のみである。

「ἐπιεικής」は「寛大な」と訳した。主人や権力者の寛大さを意味する箇所は、新約ではこの箇所と使徒 24: 4 でのフェリクスへの告発のみに登場する（名詞「ἐπιείκεια」）。「σκολιός」は「曲がった」を意味するが、本訳では「意地の悪い」と訳す。

ここで、古代地中海世界の奴隷と主人の関係について考察したい。この問題を詳細に検討している島は、古代ローマのプラウトゥス（紀元 254-184）の喜劇『カルタゴ人』を引用しつつ、「主人と奴隷の間には、奴隷への報酬—特に奴隷解放と、奴隷に対する懲罰が、同時に並存していた」ことを指摘する¹⁹。島はブラッドリーの考察を紹介し²⁰、ローマ世界の奴隷制には「報酬と懲罰」という二面性が存在していたことを指摘している。奴隷の所有権は法的にはその主人にあり、奴隷は主人に隷属する。I ペトロ書では意地の悪い主人に対しても反抗せずに従属せよと教える。奴隷を生かすも殺すも主人の権限に属するものであり、奴隷らは恐れをもって主人に仕えるだけでなく、主人は奴隷にも報いを与えた。奴隷を解放することは最大の報奨であるゆえに、意地の悪い主人に対しても誠実に仕えることによって、解放が約束されるかもしれないからである。このような主人と奴隷との関係は、「人道的な信頼関係ではなく、むしろ両者の本質的相互不信の関係を示すと言えるが、このような二面的な関係は、ローマのみならず、古代地中海世界一般の主人と奴隷の関係にも広く見られた²¹。」ただし、I ペトロ書では解放を目指す内容ではない。島は「奴隷の

¹⁷ 吉田 (2016b), 48-49 頁参照。

¹⁸ 塚本訳「奴隷達よ、神に対するあらん限りの畏れをもって主人に服従せよ」、岩隈訳、79-80 頁参照。Vgl. Schweizer, 61; Kelly, 116; Davis, 106; Goppelt, 193; Perkins, 52 (パーキンス, 97 頁); Feldmeier, 113f.; Guttenberger, 44; Vahrenforst (2016), 121f.; Achtemeier, 195f.; Elliott (2000), 517; Watson, 67f.; Dubis, 71f.; Forbes, 86.

¹⁹ 島 (2001 年), 144 頁。同 (1991 年), 18-20 頁, 同 (1993 年), 113-114 頁参照。

²⁰ K. R. Bradley, *Slaves and Masters in the Roman Empire. A Study in Social Control*, New York 1987.

²¹ 島 (2001 年), 151 頁。セナカは『道徳書簡集』XLVII, 10 において、奴隷に対する人道的な扱いを訴える。「どうか考えていただきたい—君が自分の奴隷と呼ぶ者は、種族としてわれわれと同じ源から由来し、同じ天を頂き、同じように呼吸し、同じように生き、同じように死ぬ、ということ。」しかし、セナカ自身が記すように、通常、ローマ人は奴隷に対して非人道的に扱っていたようである。同 XLVII, 11「われわれローマ人は奴隷に対して極めて横柄な、極めて残酷な、極めて軽蔑的な態度をとっているのですが。しかし、僕の忠告の要点はこうです。目下の者と暮らすには、自分が目上の者と暮らすとき、してもらいたいようにしなさい、ということです。」

奉仕に対する報酬は念頭に置かれて」おらず、「奴隷の奉仕と自由のつながりは、ここでは全く見られない」と指摘している²²。

むしろ、同書の文脈に沿って考えるならば、終わりの日に栄光に満たされるために、意地の悪い主人にも仕えるのは、この世の「寄留者」である奴隷の読者に対しての処世術と受け取れる。それゆえに、このような受け入れがたい従属を強いるのは、イエス・キリストも同じように従属していたゆえであることを 21 節以降に説明しているのである。

Iペトロ書の家庭訓(Haustafeln)：Iペトロ書2章18節以降に記されているような家庭訓(Haustafeln)は、なぜ、この文書に収められているかを巡る議論が研究者の間でなされている。バーチはIペトロ書が成立した1世紀末の社会・宗教的状况を鑑み、キリスト教が社会秩序を乱さない存在であることを「弁面する」ために(同3:15)、当時の一般的な訓戒である家庭訓を導入したとし、その護教論的機能を強調している²³。バーチのこの推論に対して、鳥は以下のような疑問点を提示している。まず、家庭訓は直接の護教論ではなく、教会内の信徒への戒めが本来的な機能である²⁴。バーチの推論に批判的なエリオットも指摘するように、同書の読者はこの世では「寄留者」であり(1:1, 17, 2:11)、世俗社会への同化を目的とする存在ではないだろう²⁵。さらに、鳥はIペトロ書の家庭訓は異教との対立という歴史的状況のみを強調するのではなく、同種の家庭訓が他の新約文書に収められているように、新約文書の全体的な流れの中に位置づけるべきであると指摘する。そして、家庭訓の対外的護教の側面のみを強調することは、当時の倫理、道徳、社会観の共通性のみを際立たせるだけであり、むしろ、キリスト教の家庭訓の独自性に注目すべきとする²⁶。鳥のバーチへの疑問点は、的を射た指摘である。Iペトロ書の家庭訓の導入は、同書の終末論的背景を抜きにして語ることはできないだろう。

19節、共同訳、新共同訳では「それは御心に適うことなのです」と意識している。「それは恵みだからである(τούτο γὰρ χάρις)」というのが直訳である(2:20, 5:12参照)。その内容は「εἰ」以下を指している²⁷。「διὰ συνείδησιν θεοῦ」は「神の意識ゆえに」と直訳的に訳した²⁸。ここでは、属格「神の(θεοῦ)」は「神を意識すること」と解するのが正し

²² 鳥(1993年), 116頁。

²³ Balch, 81-116.

²⁴ この問題に関して、バーチとエリオットの間で見解が相違している。Iペトロ書は周辺社会との「同化と調和(assimilation and conformity)」を求めていると受け取るバーチに対して、エリオットは「独自性と抵抗(distinctiveness and resistance)」であると主張する。Vgl. Horrell (2013), 213.

²⁵ Elliott (1986), 72f.

²⁶ 鳥(1993年), 112-113頁。

²⁷ 岩隈, 80頁参照。Vgl. Michaels, 139; Achtemeier, 196.

²⁸ この部分、各和訳は様々な意識を試みている。口語訳「神を仰いで」、共同訳、新共同訳「神がそうお望みだとわきまえて」、前田訳「神を思って」、フランシスコ会訳「神のことを考えて」、新改

いだらう²⁹。

「意識 (συνείδησις)」について：「συνείδησις」は「意識 (Bewusstsein, consciousness)」「良心 (Gewissen, conscience)」という意味に解されるが³⁰、ブルトマンはこの語句の元来の意味を以下のよう
に説明する。「元来は他の人との共有知 (Mitwissen mit einem anderen) を指していたが、パウロ
の時代には、すでに長いこと自己自身との共有知 (Mitwissen mit sich selbst) という意味を持つよ
うになっていた³¹。」パウロ書簡 (とりわけ I コリ 8, 10 章) において頻出語である (14 回)。I ペト
ロ書 3: 16, 21 にも記されているが、「神の (θεοῦ)」はなく、「良い (ἀγαθῆς)」という属格がある。
「διὰ τὴν συνείδησιν」という定型句をパウロは用いており (ロマ 13: 5 他)、I ペトロ書はこの影響に
あると考えられる。ただし、「神の」という属格はパウロ書簡にはない。この語句を「意識」か「良心」
のどちらに訳すか意見が分かれているが、この箇所では「神の良心 (ゆえに)」と訳すのは適切とは思
えない³²。17, 18 節で神のみを畏れることを説き、20 節で神からの恵みを強調する文脈から、苦痛
に耐える最中に神を意識するならば、それは恵みであると理解する方が適切だと思われる³³。

「苦痛に耐える (ὑποφέρω)」は、新約ではこの箇所と 1 コリ 10: 13, II テモ 3: 11 の
みに記されている。ここでは、意地の悪い主人からの仕打ちに耐えることを意味している。
そのことは恵みであると説き、この恵みは神からの恵みであることが 20 節で説明される
(5: 10, 12 も参照)。試練の中で喜ぶことはこの書簡で一貫して語られる内容であり (1: 6,
4: 12-13 他)、また、送り手は読者にキリストが現れる時に与えられる恵みを約束してい
る (1: 10, 13)。奴隷らが苦難に耐えることも、この恵みに与る前提となる。「不当な苦

訳「神の前における良心のゆえに」。

²⁹ 岩隈訳「人が神を意識しているがゆえに」、塚本訳「神であることを意識して」と動詞を補って
訳している。岩波訳「神の意識ゆえに」と田川訳「神の意識の故に」は直訳。ヴァンディッシュは「um
seines Gottesbewußtseins willen」と訳しつつも、ここは「神をめぐる意識 (Bewußtsein um Gott)」
の意味だと理解する。Windisch, 64. Vgl. Eckstein, 310; Schrage, 90 „wegen des Bewußtseins um Gott“。
エリオットは「mindful of God's will」。Elliott (2000), 519. Vgl. Best, 118.

³⁰ Vgl. Bauer, 1568f.; Liddell & Scott, 1704; Maurer, ThWNT VII, 900-918; Lüdemann, EWNT III, 721-
725 (新約聖書釈義事典 III, 342-344 頁)。

³¹ Bultmann (1953), 212 (ブルトマン, 45 頁)。Vgl. Goppelt, 194 Anm. 24.

³² 例えば、ゴッペルトは「神に結ばれた良心ゆえに (wegen seines an Gott (gebundenen) Gewis-
sens)」と理解している。Goppelt, 195f. 同様の見解は以下。Feldmeier, 111-114 „um des an Gott
(gebundenen) Gewissens willen“; Knoch, 81 „wegen des an Gott (gebundenen) Gewissens“; Schelkle,
80. Anm. 1. „im Gewissen vor Gott“。ブロックスは「神との結びつきにおいて (in der Bindung an
Gott)」と意識し、「神の意志に人が道徳的な意味で一致し、結び付いていることを意味しているもの」
とするが、「意識 (Bewusstsein)」という語も訳出すべきであろう。Brox, 133 (ブロックス, 175 頁)。
他にもヴァーレンホルストは「神の共有知ゆえに (um des Mitwissens Gottes willen)」と訳している。
Vahrenhorst (2016), 122f.

³³ 「神を意識する」ということは非常に広い意味で、神の存在を意識する、神の何たるかを意識する、
その他あらゆる点を含めて神を意識するということである。」田川訳, 300 頁。

しみを受ける (τις λύπας πάσχω ἀδίκως) の「不当な (ἀδίκως)」は、新約ではこの箇所のみで使用されている。Iペトロ書は「苦しみを受ける (πάσχω)」という語句が、書簡のなかで 12 回使用されるほど苦難を語る箇所が頻出する。

20 節、冒頭「何の誉れになるか」という修辭的疑問から始まる。「誉れ (κλέος)」は新約ではこの箇所のみ³⁴。奴隷は懲罰のために打ち叩かれることは常であったが、それが善いことを行い、苦しみを受け、それを耐え忍ぶならば恵みであると読者に教える。「善いこと (ἀγαθοποιούντες)」は「善いことをする (ἀγαθοποιέω)」の現在分詞であるが、Iペトロ書 2: 15, 3: 6, 17 で繰り返し用いられる語句である (この語句の名詞は 4: 19, 形容詞は 2: 14 で使用)³⁵。この世で善いことを行うことこそ、やがて受ける栄光に与る条件である。

19 節に続き、再び、耐えることが説かれ、恵みを再度強調する。20 節は 19 節の内容を補いつつ、「神からの」と付け加えながら、恵みの所以と根拠を訴える。「τοῦτο χάρις παρὰ θεῶν」を共同訳、新共同訳「これこそ神の御心に適うことです」(フランシスコ会訳も同様)、新改訳「神に喜ばれることです」は意識しているが、「これこそ神からの恵みである」が直訳である。岩波訳は「神のもとでの恵みだからである」と訳すが、「παρὰ θεῶν」は「神から」とした方が自然である³⁶。恵みは人間(主人)からのものではなく、神から来ることを訴えており³⁷、Iペトロ書における神中心主義(Theozentrismus)がこの箇所からも確認できるだろう。

4. Iペトロ書 2: 21-25 の分析

21 節から 24 節まで関係代名詞で繋げながら文を進める、Iペトロ書の特徴的な文体をここでも見出す。20 節までの内容を受け、接続詞「γὰρ」に導かれた 21 節は、前節までに語られた苦難を耐え忍ぶ理由を説明する。その理由は、あなた方は「召された」、または「呼ばれた (ἐκλήθητε)」からだと説く。「召す (καλέω)」は新約聖書では全ての文書に用いられている頻出句であるが (LXX でも同様)、Iペトロ書でも書簡の冒頭の 1: 15 から読者の神による「召し」が度々語られる (2: 9, 3: 9, 5: 10)。パウロ書簡と同様、

³⁴ Iクレ 5: 6, 54: 3 参照。

³⁵ この語句の反対語として「悪をなす (κακοποιέω)」が Iペトロ書では 3: 17, その形容詞が 2: 12, 14, 4: 15 で用いられている。

³⁶ 塚本訳は「神の前に喜ばれることである」とする。前田訳「神にあって恩恵です」、岩隈訳「それは神の目に(神の)愛顧をもたらすものである」は少し訳し過ぎだろう。

³⁷ Vgl. Forbes, 89.

Iペトロ書でも神（及びキリスト）によって召し出されることこそが、救いの確信へと至る道である³⁸。聖なる方に召された者は「聖なる者」であり、「選ばれた民、王の祭司団、聖なる民族、神の所有となる民」という特権的な地位を約束されている故に（1: 15-16, 2: 9）、この世で苦しみを享受することは召された者の務めとなる。「召し出された者」という語句は、何度も語られる「選びだされた（者）」（1: 1, 2: 4, 6, 9）という語句と同様に、読者は「救い至る（者）」（1: 5）としての自己認識を強める役割をこの書簡では果たしている³⁹。Iペトロ書の著者は、読者が何者であるかと説くことに集中している。おそらくそれは、入信して間もない読者を想定しているからだと思われる。ゴッペルトが指摘するように、読者はすでに「召された（アオリスト）」状態にあり、バプテスマを受けて希望へと変えられ（1: 3）、やがて到来する栄光が現れる際に喜びを得る存在である（1: 13）⁴⁰。読者は従来の習俗から離れ（1: 14, 18, 4: 4）、これまでの社会的アイデンティティーをもはや持たない存在である。それゆえ、送り手は彼、彼女らに「聖なる者」「神の民」という新しいアイデンティティーを与え、励ましているのである⁴¹

さて、次に接続詞「ὅτι」に続き、その根拠、理由が語られる⁴²。「キリストもまた（ὅτι καὶ Χριστὸς）」と添加の意味の副詞として「καὶ」が用いられ、キリストも同様に苦しめられたことが力説されている。「キリストはあなた方のために苦しめられた（Χριστὸς ἔπαθεν ὑπὲρ ὑμῶν）」は、新約テキストにしばしば見られる定型句である。「あなた方のために」という語句から、キリストの死の贖罪論的な理解を受け取ることができる⁴³。このように理解する傾向は、ロマ5: 8「Χριστὸς ὑπὲρ ἡμῶν ἀπέθανεν」、Iテサ5: 10「ἀποθανόντος ὑπὲρ ἡμῶν」においても確かめられるが、ここでは「あなた方のために（ὑπὲρ ὑμῶν）」と記されている。おそらくは、元来の伝承では「私たちのために（ὑπὲρ ἡμῶν）」であったが⁴⁴、Iペトロ書はこの句の前に記された奴隷たちへの呼びかけを意識して、書き換えた可能性が考えられる⁴⁵。また、先述したように、元来の伝承では「死なれた」であったが、

³⁸ パウロ書簡において、神の絶対的主導による「召し」がしばしば語られる。この語句はパウロの召命理解と救済理解の鍵である（ロマ1: 1, ガラ1: 15-16他）。ロマ8: 28-30では、「召し出された者」は、神が「予め知っていた（προγινώσκω）者」であることが強調されている。神の予知によって選ばれた者（Iペト1: 2）という理解と類似している。

³⁹ 吉田（2016a）、11頁参照。

⁴⁰ Goppelt, 199.

⁴¹ Vgl. Martin, 90（マーティン、114頁）。

⁴² 「ὅτι καὶ Χριστὸς」を伴って受難のキリストを語るのは3: 18も同様。

⁴³ Vgl. Hengel, 54f（ヘンゲル、102頁）。

⁴⁴ 「私たちのために」と記す異読もあるが、有力な読みは「あなた方のために」。

⁴⁵ Vgl. Brox, 135（ブロックス、178頁）。

ここで著者は文脈に即して「苦しまれた」と書き換えたと思われる⁴⁶。後の24節では「彼(キリスト)は私たちの罪を自ら身をもって、木の上に運び上げた(ὅς τὰς ἀμαρτίας ἡμῶν αὐτὸς ἀνήνεγκεν ἐν τῷ σώματι αὐτοῦ ἐπὶ τὸ ξύλον)」とあり、「私たちの罪」が強調されている。

Iペトロ書1章18節では、イエス・キリストの血によって「あなた方は贖われた(ἐλυτρώθητε)」と断言している(テト2:14, マルコ10:45参照)。しかし、この文脈において、イエスの贖罪死理解について展開するよりは、死を前にしたイエスの従順な姿を範とすることを前面に打ち出しているように思われる。

次に「模範を残された」とある。「模範, 手本(ὕπογραμμός)」という語句は、新約ではこの箇所のみ用いられている⁴⁷。使徒教父文書では、キリストの受難と忍耐の姿を語る文脈で、Iペトロ書と同様の用いられ方をしている(Iクレ16:17, ポリ手紙8:2, Iクレ5:7ではパウロが主語)。「後に残す(ὕπολιμπάνω)」も新約ではこの箇所のみである。「足跡(ἄχνος)」はパウロ書簡(ロマ4:12, IIコリ12:18)でも見出す語句である(その他、フィロン『徳論』64)。Iマカバイ書, IIマカバイ書などに残されたユダヤ教の殉教文学において、後世の人々の模範となる殉教者(証人(μάρτυς))の姿が記されているように(Iペト5:1「受難の証人(μάρτυς)」参照)、ここでも不当な苦しみを受けている読者(奴隷)らに、その後に踏み従いつつ、今しばらくは忍耐することを訴える。「踏み従う(ἐπακολουθέω)」も新約では稀な語句であり、成立の遅い後期文書に見出す(マコ16:20, Iテモ5:10, 24)⁴⁸。キリストは読者らの先を行く先駆者として、その足跡に従うように先の勧告を根拠づける。この足跡の具体性は、22節から詳細に語られていく。21節は、キリストの受難の姿を模範とすべきであるというIペトロ書全体を視野に含みつつ、キリスト論を中心とした勧告句であると理解できる⁴⁹。

22節以降はイザヤ書53節に記される、いわゆる「主の僕」とキリストの受難を合わせ

⁴⁶ Vgl. Hengel, 90 Anm. 6 (ヘンゲル, 165-167頁, 注6)。

⁴⁷ Vgl. Schrenk, ThWNT I, 772f. 元来の動詞「ὑπογράφω」は「下を書く」であるが、「手本として書く」ことを意味する。Vgl. Goppelt, 201. 速水, 423頁参照。新約では通常、良い意味でも悪い意味でも「模範を示す(与える)」際に、「模範(ὕποδειγμα)」が用いられる(ヨハ13:15, ヤコ5:10, ヘブ4:11, IIペト2:6)。LXXでも殉教者の生き方や信仰者の模範を示す際、同語句が用いられる(IIマカ6:28, 31, IVマカ17:23, シラ44:16)。Iペトの著者がなぜ、この語句を使用しなかったのかは不明。Iペト5:3では「τύπος」である(IIテサ3:9参照)。パウロ書簡では書簡の読者に宛てて、模範(神, キリストやパウロ)に「倣う者(μιμητής)」になることが度々勧められる(Iコリ4:16, IIコリ1:1, Iテサ1:6, 2:14, 他にもエフェ5:1, ヘブ6:12)。

⁴⁸ LXXではレビ19:4では、偶像に従うこと, ヨシュ14:8, 9, イザ55:3は神に従うことを示す。

⁴⁹ Vgl. Breytenbach, 446.

ながら、同箇所を部分々々に引用しつつ展開する。22 節から 24 節まで繋いでいく関係代名詞「ὃς」は、前節のキリストを指している。イエスの受難の模様とその悲劇的な最期を詩篇に記される「苦難の義人」（詩篇 22, 41, 69 章他）の姿に重ねて理解するのは、初期キリスト教の文書、とりわけ最初期に成立したと考えられている受難伝承（マルコ 15 章）においてすでに見られる。

22 節は LXX イザヤ書 53 章 9 節 b の引用句である。冒頭の語句は別の語句に置き換えられているが、LXX のテキストと一致している。LXX では「ὄτι ἀνομίαν」だが、ここでは「ὃς ἀμαρτίαν」である。「不法、不義（ἀνομία）」ではなく、「罪（ἀμαρτία）」に変更したのは、24 節以降の文脈に合わせるためだと思われる（表 1 参照）⁵⁰。また、罪なきキリストの姿は、1 章 19 節の文言「傷や汚れのない子羊のような尊きキリストの血（τιμίω αἵματι ὡς ἀμνοῦ ἀμώμου καὶ ἀσπίλου Χριστοῦ）」とも一致する（ヨハ 8: 46, II コリ 5: 21, ヘブ 4: 15, 7: 26, I ヨハ 3: 5）。

イザヤ書 53 章「主の僕」の引用について⁵¹：通称「主の僕」、「苦難の僕」と称されるイザヤ書 53 章のテキストは、初期キリスト教の文書においてしばしば引用されている。各福音書においては、イエスの運命について詩篇からの引用と並び、イザヤ書 53 章の預言から理解するよう促している⁵²。「使徒言行録」では、エチオピアの高官がエルサレムからの帰途、イザヤ書を読んでいたことが記されている。彼が読んでいた箇所は 53 章 7-8 節である（使徒 8 章 32-33 節）。フィリポに語りかけられた高官は、彼からバプテスマを受ける。ただし、この箇所では、イエスの贖罪死に関する直接的な言及はない⁵³。I ペトロ書のように、イエスの運命をイザヤ書 53 章の文脈と合わせつつ、人々の代わりに苦役を負わされる義人＝人々のために受難を受けるキリストと理解させ、その模範に従うように促す箇所は他にはない。ただし、新約聖書以外の初期キリスト教文書である「クレメンスの第一の手紙」16 章はその傾向が感じられる（バルナバ 5 章 2 節も参照）。もっとも同書簡 16 章では、へり

⁵⁰ 同様の見解は、Goppelt, 207; Michaels, 145; Achtemeier, 200。I クレ 16: 10 では変更せず、イザヤ書をそのまま引用している。I ペトロ書の同箇所を引用したと考えられるポリ手紙 8: 1 では「ὃς ἀμαρτίαν」。ヴァーレンホルストは、20 節と関連付け、22 節の「ἀμαρτία」を「過ち (Fehler)」と訳す。つまり、I ペトロ書の著者は、過ちを犯さない奴隷とキリストを対応させていると考えるからである。しかし、この文脈は 20 節より 24 節との関係を重視すべきであろう。Vahrenhorst (2013), 266f; ders., (2016), 126。

⁵¹ 当該問題について、ヴォルフによる包括的な研究書がある。H. W. Wolf, *Jesaja 53 im Urchristentum*, Berlin 1952³。また、中沢が新約聖書における引用箇所を概観している。中沢, 45-60 頁。

⁵² マタイ 8: 17 (イザヤ 53: 4)、ルカ 22: 37 (イザヤ 53: 12)、ヨハネ 12: 38 (イザヤ 53: 1)。マルコにはイザヤ書 53 章の直接の引用句はない。だが、マルコ 10: 44-45 とイザヤ 53: 10-12 の内容は類似している。ロマ 4: 25 と I コリ 15: 3 もイザヤ 53 章で用いられている語句と似ているが、影響を受けているかどうか判断する材料は乏しい。

⁵³ ルカはこの箇所を、キリスト論的に読むように読者に促すために、イザヤ書 53 章 8 節の後半部分をあえて削除していると荒井は指摘する。荒井, 81-82 頁。

くだったキリストについて説明する際、そのほとんどをイザヤ書の引用から論証しており、それに比べると1ペトロ書での引用は控えめである。

23節にはイザヤ書の引用はないが、内容からは53章7, 12節に近い。「罵られる、侮辱される (λοιδορούμενος)」はパウロが自らの伝道の苦勞を語る文脈でも用いられる語句であるが(1コリ4:12)、イエスを主語とするのはこの箇所だけである。この箇所は後の「侮辱をもって侮辱に報いる (ἡ λοιδορίαν ἀντὶ λοιδορίας)」(3:9)を先取りし、読者、ここではとりわけ奴隷たちにキリストが行った業と同じような業を行うことを奨励する(ポリ手紙2:2参照)。罵られても返さないその姿は、福音書の受難のキリストの姿を思い起こさせるが(マルコ15:16以下参照)、「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」と言うイエスの言葉と行いは(マタ5:43-48, ルカ6:27-36他参照)、23節aで示されている姿そのものである。

キリストは「苦しみを受ける (πάσχω)」が、それでも、「脅す (ἀπειλέω)」ことはない。キリストは自らの身を正しく裁かれる方に「委ねた (παρεδίδου)」からである。「委ねた」と訳した語句 (παραδίδομι) は、イエスの受難の場面などで「引き渡される」と訳される(マコ14:41, 15:1, ロマ4:25, 1コリ11:23他)。しかし、ここでは「罵る」「脅す」と同様に、反復を意味する未完了過去で記されている。そのため、キリストが何度も「引き渡される」というのは不自然であり、「正しく裁かれる方(神)」(1ペト1:17, 4:5)に身を「委ねた」(委ねていた)と理解するのが正しい⁵⁴。ここでは一回きりのイエスの死ではなく、イエスはいつも苦しみに耐え、復讐せず、神に身を任せていたことを教えているのだろう。また、ここでは目的語がないので、何(誰)を委ねるのか議論されている。敵対者を委ねるといふ意見もあるが⁵⁵、イエス自身を神に委ねると受け取るのが正確だろう⁵⁶。

24節では再び、イザヤ書の引用を確認できる(表1参照)。「ἐν τῷ σώματι」の前置詞「ἐν」は二つの意味に解せる。手段「身で」「身をもって」か、場所「身において」と解するか見解が分かれるが、ここでは前者「身をもって」と訳したい⁵⁷。イエスは罪をその身をもって担う、という21節の贖罪理解が繰り返されている。この贖罪理解は、次の語句からも

⁵⁴ 同様の見解は田川、304頁。和訳のほとんどは「委ねた」、ないしは「任せた」。

⁵⁵ Michaels, 147. エリオットはこの部分は「(he) committed his cause」と訳し、「cause」はキリストの生涯の働きとその証明であるとする。Elliott (2000), 531. Vgl. Kelly, 121.

⁵⁶ Vgl. Dubis, 78. 速水, 423頁参照。

⁵⁷ 岩隈, 81頁参照。

受け取れる。イザヤ書 53 章 12 節に記された「運び上げる (ἀναφέρω)」(I ペト 2: 5 参照) は、LXX において度々、犠牲祭儀にまつわる術語「運ぶ」として用いられていることに注意しなければならない⁵⁸。新約文書においてもヘブ 7: 27, ヤコ 2: 21 において、祭儀にまつわる文脈で用いられている。とりわけヘブ 9: 28 (13: 15 参照) は、I ペトロ書と同じようにアオリスト形で記されている (「キリストも一度人々の罪を担うために献げられた (ὁ Χριστὸς ἅπαξ προσενεχθεὶς εἰς τὸ πολλῶν ἀνευγκεῖν ἁμαρτίας)」。ヘブライ書と同様に I ペトロ書においても、キリストの一度限りの贖いの死がイザヤ書の引用に導かれて強調されている。また、「αὐτὸς (自ら)」と強調することによって、自らの体を自身で運び上げたという、イエス・キリストの意思を読み取ることができるだろう。「木の上に」の「木 (ξύλον)」は、ここでは「十字架」を意味している (申 21: 22, 23, ガラ 3: 13, 使 5: 30, 10: 39, 13: 29)⁵⁹。

接続詞「ἵνα」に導かれて、イエスの意思の目的が語られる。主語は「彼 (キリスト)」から再び「私たち」に変わる。「罪に死ぬ (ταῖς ἁμαρτίαις ἀπογενόμενοι)」の「ἀπογίνομαι」は、LXX、及び新約でもこの箇所のみ用いられているが、この語句も釈義家の間で解釈が分かれている。この動詞は「離れる」と解するか、それとも「死ぬ」と解するべきだろうか⁶⁰。ここでは与格に続いているので、「罪に(対して)死ぬ」と受け取りたい⁶¹。「罪に(対して)死に」、「義に対して生きる」と対になっていると受け取れるからだ⁶²。「義 (δικαιοσύνη)」は、I ペトロ書においてこの箇所と 3 章 14 節のみに記されている。パウロ書簡のようにこの語句に関して明確な説明はなされていないが、それまでの異教徒として生活ではなく、バプテスマを受け、希望として新生させられた生き方を指しているのではなかろうか (1: 3 参照)⁶³。「悪を避け、善を行い、平和を求める」(3: 11) ことこそ、「義

⁵⁸ 例えば出 30: 9, 20, レビ 23: 11, 民 23: 30 他。Vgl. Muraoka, 47; Kremer, EWNT I, 226f (新約聖書釈義事典 I, 128 頁)。ただし、エリオットが正しく指摘するように、木 (十字架) を祭壇 (Altar) に見立てキリストが自ら犠牲としてそこに差し出すと受け取るシェルクレの理解は行き過ぎだと思われる。Schelkle, 85; Elliott (2000), 531.

⁵⁹ バルナバ 5: 13, 8: 5, 12: 1, ポリ手紙 8: 1 参照。

⁶⁰ 「離れる」と理解するのは以下。Selwyn, 181; Kelly, 123; Michaels, 148f; Elliott (2000), 535; Vahrenhorst (2016), 128f. 和訳では以下。新改訳「罪を離れ」、岩波訳「それらの罪から離れて」、田川訳「罪を離れて」。Elliott (2000), 532; Schelkle, 85.

⁶¹ ロマ 6: 11 にこれと類似した文言があるが、そこでは、罪は複数ではなく単数である。

⁶² Vgl. Goppelt, 210; Osborne, 401; Davids, 113.

⁶³ アクティマイアーは「義に生きる」とは「神の意思に従った生き方」を意味すると理解している。Achtmeier, 20f. Vgl. Schweizer, 65f. I ペトロ書では、ロマ書 6 章のように救済論的枠組みの中で罪と義を論じてはいない。ここではむしろ、相応しい業に励む道徳的生活態度を示唆する倫理的意味合いが強い。Kertelge, EWNT I, 794 (新約聖書釈義事典 I, 380 頁)。速水, 424 頁参照。

人（δικαιος）」（3：12, 18, 4：18）の生き方である。

次の「その傷によってあなた方は癒やされた」もイザヤ書 53 章 5 節の引用を意識して記されていると考える。だが、ここでも主語が「私たち」から「あなた方」に変更されている（LXX では「私たち」）。主語の交代は 25 節にも引き継がれている⁶⁴。「傷」はここでは、キリストの受難を意味していると思われる。

続いて 25 節は、接続詞「γάρ」を伴い、前節の癒された理由が語られる。この箇所は「羊のように迷う」という、これまでと同じようにイザヤ書 53 章 6 節 a からの引用があるが（LXX では「ἐπλανήθημεν」）、24 節までのキリストの受難の記述とは多少異なっていることに気づく。25 節は 24 節までの受難のキリストの伝承に I ペトロ書書の著者が付加した節だろうか。その明確な根拠を見出すことができないが、いずれにせよ 25 節は 24 節の内容とは相違する⁶⁵。迷った羊は、命の危険があるので連れ戻す必要があり（出 23：4, 申 22：1 参照）、その際、牧者は大切な役割を果たす（エゼ 34：1-10 参照）。書簡の送り手は入信前の読者を正しい道から外れ、義に沿わない生き方をする迷った羊と捉え、彼、彼女らは牧者のもとに戻ったことが宣言される。ルカ文書に度々登場する「ἐπιστρέφω」は、ここでも立ち返りを意味している⁶⁶。魂の「牧者（ποιμήν）」、「監督者（ἐπίσκοπος）」はキリストを指している⁶⁷。「牧者」は主に福音書に記されているが、エフェ 4：11 では初代教会の職位の説明で「牧者」と呼ばれている人がいることを示唆している。また、ヘブ 13：20 では I ペトロ書と同様に、イエス・キリストを指している。5：4 においては、キリストは牧者を束ねる大牧者（ἀρχιποιμήν）と呼ばれている（ヘブ 13：20 参照）。

まとめ

以下、これまでの考察をまとめる。I ペトロ書 2 章 18-25 節の前半部分は奴隷への勧告、後半はキリストの受難の意義を語っている。それぞれ別の伝承であると考えられ、二つを組み合わせるのは I ペトロ書の送り手であろう。内容としては、不当な苦しみを受ける奴隷に対し、キリストが苦しみを耐えたように彼、彼女らも忍耐することが神からの恵みで

⁶⁴ I ペトロ書では通常、二人称複数「あなた方」と呼びかけられており、一人称複数「私たち」は 4 回しか記されていない（1：3 で 2 回、2：24, 4：17）。Vgl. Jobs, 198.

⁶⁵ 25 節は、どちらかというばイスラエルの牧者を語るエゼキエル書 34 章の内容に近い。

⁶⁶ ルカ 17：4, 使 3：19, 9：35, 11：21, 14：15, ユデイ 5：19, I テサ 1：9 参照。

⁶⁷ オズボーンはキリストではなく、4：19, 5：2 から神を指しているとするが、新約文書では牧者はキリストと受け取られており（マコ 14：27, ヨハ 10：2, 11-12, 14, 16, ヘブ 13：20, 黙 7：17）、また、5：4 からは終末に到来する大牧者は明らかにキリストである。Osborne, 404. I クレ 61：3 「大祭司であり魂の警備人であるイエス・キリスト」、ポリ殉 19：2 「私たちの魂の救い主、私たちの肉体の導き手、全世界の公同なる教会の牧者私たちの主イエス・キリスト」参照。

あると説くものである。

この主張は、Iペトロ書全体のそれと通じている。読者を襲う様々な試練には理由がある。それは、かつて「キリストもまた苦しんだ」(2: 21, 3: 18) からである。この書簡は同じよう意味内容の文を繰り返しながら、読者らの苦しみとキリストの受難を重ねて、読者にキリストと同一化するように促している。そして、「キリストの苦しみに与れば与るほど、喜びなさい。キリストの栄光が顕れる時に」(4: 13) と教えている。

表 1⁶⁸

I ペトロ 2 章 21-25 節	イザヤ 53 章
<p>²¹ εἰς τοῦτο γὰρ ἐκλήθητε, ὅτι καὶ Χριστὸς ἔπαθεν ὑπὲρ ὑμῶν ὑμῖν ὑπολιμπάνων ὑπογραμμόν, ἵνα ἐπακολουθήσητε τοῖς ἴχνεσιν αὐτοῦ,</p> <p>²² ὃς ἁμαρτίαν οὐκ ἐποίησεν οὐδὲ εὐρέθη δόλος ἐν τῷ στόματι αὐτοῦ,</p> <p>²³ ὃς λοιδορούμενος οὐκ ἀντελοιδορεῖ, πάσχων οὐκ ἠπείλει, παρεδίδου δὲ τῷ κρίνοντι δικαίως</p> <p>²⁴ ὃς τὰς ἁμαρτίας ἡμῶν αὐτὸς ἀνήνεγκεν ἐν τῷ</p> <p>σώματι αὐτοῦ ἐπὶ τὸ ξύλον, ἵνα ταῖς ἁμαρτίαις ἀπογενόμενοι τῇ δικαιοσύνῃ ζήσωμεν, οὗ τῷ μῶλωπι <u>ιάθητε</u>.</p> <p>²⁵ ἦτε γὰρ ὡς πρόβατα πλανώμενοι, ἀλλ' ἐπεστράφητε νῦν ἐπὶ τὸν ποιμένα καὶ ἐπίσκοπον τῶν ψυχῶν ὑμῶν.</p>	<p>⁹ ὅτι ἀνομίαν οὐκ ἐποίησεν οὐδὲ εὐρέθη δόλος ἐν τῷ στόματι αὐτοῦ</p> <p>¹² τῶν ἰσχυρῶν μεριεῖ σκυλα ἀνθ' ὧν παρεδόθη εἰς θάνατον</p> <p>⁴ οὗτος τὰς ἁμαρτίας ἡμῶν φέρει</p> <p>¹¹ καὶ τὰς ἁμαρτίας αὐτῶν αὐτὸς ἀνοίσει</p> <p>¹² καὶ αὐτὸς ἁμαρτίας πολλῶν ἀνήνεγκεν</p> <p>⁵ ἐπ' αὐτόν τῷ μῶλωπι αὐτοῦ ἡμεῖς <u>ιάθημεν</u></p> <p>⁶ πάντες ὡς πρόβατα ἐπλανήθημεν</p>

⁶⁸ Vgl. Horrell, 69f; Elliott (2000), 547.

参考文献

- 『舊新約聖書』, 日本聖書協会, 1982年〔文語訳〕
- 『聖書 口語訳』, 日本聖書協会, 1955年〔口語訳〕
- 『新約聖書 共同訳』, 日本聖書協会, 1987年〔共同訳〕
- 『聖書 新共同訳』, 日本聖書協会, 1987年〔新共同訳〕
- 『聖書 新改訳』, 新日本聖書刊行会, 2014年³〔新改訳〕
- 前田護郎『新約聖書』, 中央公論社, 1983年〔前田訳〕
- 岩隈直訳註『希和对訳脚註つき新約聖書 12 公同書簡 上』, 山本書店, 1986年〔岩隈訳〕
- 新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』, 岩波書店, 2004年〔岩波訳〕
- フランシスコ会聖書研究所『聖書 — 原文校訂による口語訳』, サンパウロ, 2011年〔フランシスコ会訳〕
- 塚本虎二訳新約聖書刊行会『塚本虎二訳新約聖書』, 新教出版社, 2011年〔塚本訳〕
- 田川建三『新約聖書 訳と註 第六巻 公同書簡／ヘブライ書』, 作品社, 2015年〔田川訳〕
- Bauer, W., Griechisch-deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der frühchristlichen Literatur, hg. von K. Aland und B. Aland, Berlin / New York, 1988⁶.
- Blass, F. / A. Debrunner, Grammatik des neutestamentlichen Griechisch, bearb. von F. Rehkopf, Göttingen 1979¹⁵.
- Liddell, H. G. / R. Scott, A Greek-English Lexicon, revised and augmented by H. S. Jones, Oxford 1968 (with a Supplement).
- Kittel, G. / G. Friedrich, (Hg.), Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament, 1-10 Bde, Stuttgart 1933-1979.
- Horst, B. / G. Schneider, Exegetisches Wörterbuch zum Neuen Testament, Stuttgart u. a. 1992²(荒井献, H.J. マルクス監修『ギリシア語 新約聖書釈義事典 縮刷版』, 教文館, 2015年).
- Muraoka, T., A Greek-English Lexicon of the Septuagint, Louvain u. a. 2009.
- Seneca, Ad Lucilium epistulae morales, in three volumes, with an English translation by Richard M. Gummere, Cambridge, Mass. 1917-1925 (茂手木元蔵訳『道德書簡集 (全) 倫理の手紙集』, 東海大学出版会, 1992年).

- 荒井 献『現代聖書注解全書 使徒行伝 中巻』, 新教出版社, 2014 年
- 本村凌二『薄闇のローマ世界 嬰兒遺棄と奴隸制』, 東京大学出版会, 1993 年
- 島 創平「ローマの奴隸制とキリスト教 — コロサイ書 3 章 22 節-4 章 1 節の歴史的背景 —」, 『東洋英和女学院短期大学研究紀要』(第 30 号), 1991 年, 15-24 頁
- 「古代地中海世界の「家庭訓」における主人-奴隸関係について — 第一ペテロ書 2 章 18 節~ 25 節を手がかりとして —」, 『西洋史研究』(第 22 号), 1993 年, 111-123 頁
- 『初期キリスト教とローマ帝国』, 新教出版社, 2001 年
- 「『コリントの信徒への手紙 1』7 章 21 節の解釈をめぐって — 初期キリスト教と奴隸制の問題 —」, 『キリスト教史学』第 65 集, 2011 年, 28-40 頁。
- 辻 学「ペトロの手紙一」, 山内 真監修『新共同訳 新約聖書略解』所収, 日本基督教団出版局, 2000 年, 686-697 頁
- 中沢治樹『苦難の僕 — イザヤ書 53 章の研究 —』, 新教出版社, 1964 年
- 速水敏彦「ペトロの手紙一」, 川島貞雄, 橋本滋男, 堀田雄康編『新共同訳 新約聖書注解 II』所収, 日本基督教団出版局, 1991 年, 410-431 頁
- 吉田 新「I ペテロ書の主題 — I ペテロ書 1 章 1-2 節について —」, 『キリスト教文化研究所 紀要』(第 34 号), 2016 年, 1-19 頁 (2016a)
- 「『ペトロの第一の手紙』研究 (2) — 王への服従: I ペテロ書 2 章 13-17 節について —」, 『人文学と神学』(第 11 号), 2016 年, 39-59 頁 (2016b)
- Achtemeier, P. J., 1 Peter. A Commentary on First Peter, Minneapolis 1996.
- Balch, D. L., Let wives be submissive. The Domestic Code in 1 Peter, Atlanta 1981.
- Balz, H. / W. Schrage, Die „Katholischen“ Briefe. Die Briefe des Jakobus, Petrus, Johannes und Judas, NTD 10, Göttingen u. a. 1973¹¹.
- Best, E., 1 Peter, London 1971.
- Bradley, K. R., Slaves and Masters in the Roman Empire. A Study in Social Control, New York 1987.
- Breytenbach, C., „Christus litt euret wegen“. Zur Rezeption von Jesaja 53 LXX und anderen früh-jüdischen Traditionen im 1. Petrusbrief, in: J. Frey, / J. Schröter (Hg.), Deutungen des Todes Jesu im Neuen Testament, Tübingen 2005, 437-454.
- Brox, N., Der erste Petrusbrief, EKK XXI, Zürich u. a. 1979 (N. ブロックス (角田信三郎訳) 『EKK 新約聖書註解 XXI ペテロの第一の手紙』, 教文館, 1995 年).

- Bultmann, R., Bekenntnis- und Liedfragmente im ersten Petrusbrief, in : E. Dinkler (Hg.), Exegetica. Aufsätze zur Erforschung des Neuen Testaments, Tübingen 1967, 285-297 (R. プルトマン (杉原助訳)「ペテロ第一の手紙にある告白及び讃歌の断片」, 『プルトマン著作集 聖書学論文集 II 8』所収, 新教出版社, 1985年, 116-137頁).
- Ders., Theologie des Neuen Testaments, Tübingen 1953 (川端純四郎訳『プルトマン著作集 新約聖書神学 II 4』, 新教出版社, 1980年²⁾).
- Chaster, A. / R. P. Martin, The theology of the letters of James, Peter, and Jude, Cambridge 1994 (A. チェスター, R. マーティン (辻学訳)『叢書 新約聖書神学 13 共同書簡の神学』, 新教出版社, 2003年).
- Davids, P., The First Epistle of Peter, Grand Rapids, Mich., 1990.
- Deichgräber, R., Gotteshymnus und Christushymnus in der frühen Christenheit. Untersuchungen zu Form, Sprache und Stil der frühchristlichen Hymnen, Göttingen 1967.
- Dubis, M., 1 Peter. A Handbook on the Greek Text, 2010 Waco, Tex.
- Eckstein, H-J., Der Begriff Syneidesis bei Paulus. Eine neutestamentlich - exegetische Untersuchung zum Gewissensbegriff, Tübingen 1983.
- Elliott, J. H., 1 Peter, Its Situation and Strategy : A Discussion with David Balch, Perspectives on 1 Peter, in : C. H. Talbert (ed.), Perspectives on First Peter , Macon, Ga. 1986, 61-78.
- Ders., 1 Peter : A New Translation with Introduction and Commentary, The Anchor Bible 37B, New York 2000.
- Feldmeier, R., Der erste Brief des Petrus, ThHK 15/1, Leipzig 2005.
- Forbes, G. W., 1 Peter, Nashville, Tennessee 2014.
- Goppelt, L., Der Erste Petrusbrief, KEK 12/1, Göttingen 1978⁸.
- Guttenberger, G. ; Passio Christiana. Die alltagsmartyrologische Position des Ersten Petrusbriefes, Stuttgart 2010.
- Hengel, M., The Atonement. A Study of the Origins of the Doctrine in the New Testament, London 1981 (M. ヘンゲル (川島貞雄 早川良躬訳)『贖罪 新約聖書におけるその教えの起源』教文館, 2006年).
- Horrell, D. G., Becoming Christian. Essays on 1 Peter and the Making of Christian Identity, London u. a. 2013.
- Jobes, K. H., 1 Peter, Grand Rapids, Mic. 2005.
- Michaels, J. R., 1 Peter, WBC 49, Waco, Tex. 1988.

- Lohse, E., Paränese und Kerygma im 1. Petrusbrief, ZNW 45 (1954), 68–89.
- Kelly, J. N. D., A Commentary on the Epistles of Peter and of Jude, London 1969.
- Knoch, O., Der Erste und Zweite Petrusbrief / Der Judasbrief, RNT, Regensburg 1990.
- Osborne, T. P., Guide Lines for Christian Suffering. A Source-Critical and Theological Study of 1 Peter 2, 21-25, Bib 64 (1983), 381-408.
- Patsch, H., Zum alttestamentlichen Hintergrund von Römer 4: 25 und 1 Petrus 2: 24, ZNW 60 (1969), 273-279.
- Perkins, P., First and Second Peter, James, and Jude, Louisville 1995 (P. パーキンス (山口雅弘訳) 『現代聖書注解 ペトロの手紙 1, 2 ヤコブの手紙 ユダの手紙』, 日本基督教団出版局, 1998年).
- Schelkle, K. H., Die Petrusbrief, der Judasbrief, HThK XIII/2, Freiburg / Basel / Wien 1976⁴.
- Schreiner, T. R., 1, 2 Peter, Jude, NAC 37, Nashville, Tenn. 2003.
- Schweizer, E., Der erste Petrusbrief, Zürich 1972³.
- Selwyn, E. G., The First Epistle of St. Peter. The Greek Text with Introduction, Notes and Essays, 1981².
- Vahrenhorst, M., Der Text der Septuaginta in den Zitaten des 1. Petrusbriefs, in: J. de Vries, J. / M. Karrer, (Hg.), Textual History and the Reception of Scripture in Early Christianity, Atlanta 2013, 259-275.
- Ders., Der erste Brief des Petrus, Stuttgart 2016.
- Wengst, K., Christologische Formeln und Lieder des Urchristentums, Gütersloh 1973².
- Waston, D. R. / T. Callan, First and Second Peter, Grand Rapids, Mich. 2012.
- Windisch, H. / H. Preisker, Die Katholischen Briefe, HNT 15, Tübingen 1951³.
- Wolff, H. W., Jesaja 53 im Urchristentum, Berlin 1952³.